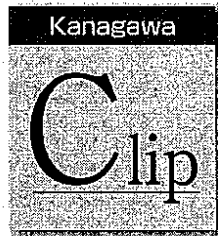


Monday 経済

県造園業協会が、日本庭園を造る技能を継承するため、若手造園人を養成する塾「庭守」を立ち上げて7年になる。日本庭園の需要が激減し、技を伝える現場が減る中で、匠たちがボランティアで指導に当たってきた。その成果として、県立相模原公園(相模原市南区)にある日本庭園で改修作業が進んでいる。

(真野 太樹)



荒川 昭男
さ くん

週末の相模原公園。遊びに来た親子連れが見学する中、25人ほどの若手たちが熱心に庭造りに励んでいた。「須弥山」と呼ばれる古代インド仏教の聖山を模した石組みを中心に、丹波石や木曽石を敷き詰め、枯れ流れも備えた本格的な日本庭園が姿を現してきている。

職人の世界では若手と呼ばれてしまいが、生徒の平均年齢は40歳近い。すでに造園会社で指導的な立場にあつたり、独立し

県造園業協会が養成塾「庭守」

て造園業を営む人もいる。そうした人たちが相手に石の選び方から教え込むのは、横浜ミスターでもある「庭守荒川」(横浜緑区)の荒川昭男さん(68)ら、この道数十年の匠だ。

「自分たちは、仕事は目で盗めて育ったが、今は盗む現場がなくなってしまった。自分は辛かったから、少しでも若い人に分けてやりたい」。荒川さんは庭守を始めた動機を語る。

自身は大学卒業後、京都の造園会社で修業を積んだ。親方は恐ろしかったが、寺院や個人宅、料理屋など本格的な庭の仕事がいくらかでもあり、「毎日、嫌になるほど技を盗めた」。



だが、バブル期を最後に時代が変わった。日本庭園が減る一方、ガーデニングが普及。ネットには情報があふれ、ホームセンターで道具や材料をそろえて庭造りを楽しむ人が増えた。

職人が活躍する場所は減り、日本庭園を志して造園の世界に入っても、日々の仕事は芝刈りや街路樹の手入れなどが中心で、多くの職人がギャップに悩んでいる。日本庭園は「造ったときにはまだ2、3割。その後の管理で、100パーセントに近づく」「経験を集めれば、石がどこに行きたがっているか分かるよ

うになる」(荒川さん)という奥深い世界。特に、本格的に石を触る機会が激減している現状に、荒川さんは危機感を覚えてきたという。



これまでは勉強会のたびに、借地に「造っては壊し」の繰り返しだった。以前に造った庭園が火災で焼失したため、今回は塾始まって以来初めて後世に残る仕事となり、生徒たちも必死だ。鈴木寿樹さん(43)は横浜市内で造園業を営む傍ら7年間、「仕事で石を扱うこともあったが、僕らがやっていたことはお遊びだった」と基本から勉強を続けてきた。川崎市内の造園会社に通じる神山洋さん(45)は、街路樹剪定士の講師を務めるベテランだが「日本庭園をやりたかったので無我夢中。学んだことを後輩たちにも教えていきたい」と意気込む。

今回は、通常なら1千万円規模で請け負う仕事を、材料も関係者が持ち寄るなどして進めおり、秋には県に寄贈する。同協会の渡邊宣昭会長(横浜植木会長)は「若い人が造園の仕事に夢を持っているよう、伝統技術を残すことが大切。今後も県などと協力し、若い人たちに日本庭園造りの場を提供していきたい」と話している。

日本庭園の技を継承

